

西大寺会陽と宝木争奪戦

—「御福」を中心とする地域とその身体文化—

瀬戸邦弘

鳥取大学教育センター

1. 「御福」を中心とする地域文化

岡山市に位置する西大寺観音院では旧暦の小正月に近い毎年2月第三土曜日に「会陽ⁱ」という行事が行われている。会陽とはこの地方の密教系寺院の修正会ⁱⁱや神社の正月の祭礼に付随して行われる行事ⁱⁱⁱで、西大寺観音院の修正会ではその結願日に「宝木^{iv}」と呼ばれる木片が裸群に投下され激しい争奪戦が繰り広げられており、これを「宝木争奪戦^v」と称する。そもそも、会陽行事は西大寺観音院に限らず岡山県（あわせて香川県の一部）の瀬戸内沿岸地域を中心に散在し、往時は岡山県内だけでも100ヶ所以上で行われていたと言われる。この地域では宝木を得たものを「福男^{vi}」と呼び、彼らは一生の「御福^{vii}」を手に入れるとされる。特に西大寺観音院の会陽は500年以上の歴史を有し、この地域の春の風物詩ともなっている。また、西大寺の会陽は参加者がまわし

姿で登場する「裸祭^{viii}」としても知られ、昭和34年には岡山県の無形民俗文化財^{ix}に、また平成28年には国指定重要無形民俗文化財に指定されている^x。

ところで、会陽における宝木争奪戦は、参加者が単に自身の力で競い合うコンペティションというわけではない。会陽が近づくと参加者達は宝木を「授かれる」ように、日々精進潔斎に励み、心と身体を磨くことになる。西大寺観音院の会陽行事はこれまで争奪戦の新奇さや激しさに注目が集まるが多かった。しかし、本稿では西大寺観音院の会陽行事の本質を理解するべく、宝木争奪戦に際して参加者が「自身に求め／神仏から求められる心と身体」、そして、それらを原資として得られる「御福」に関して考察を行うことになる。特に、信仰実践とそれを実現するためのメディアとしての身体に注目し、それらが如何に地域文脈で醸成されてきたのか、信仰と地域が育んできた伝統的身体文化に関する考察であり、延いては、

前近代という空間で育まれていた日本人の身体観に関する研究の一助としたい。

2. 西大寺観音院と門前町西大寺

一般に「西大寺」と呼ばれるこの寺院は、正式には高野山真言宗別格本山金陵山西大寺観音院と呼称され、岡山県岡山市東区西大寺に位置し千手観音を本尊とする真言宗の寺院である。これまで歴史上、たびたびの火災に見舞われ、本寺院には14世紀を遡る資料が残されていない。そのために、その創建に関しては不明な点も多いが、寺伝では天平勝宝三年（751年）頃周防国の藤原皆足^{viii}が、金岡郷に千手観音を安置する草庵を開基したのが始まりとされ、その後宝亀八年（777年）に安隆上人が竜神のお告げを受け、現在の場所に観音堂を建立したとされている。当初は「犀戴寺」と表されていたが、承久三年（1221年）に後鳥羽上皇により「西大寺」と改称され、その後、度重なる増改築を経て現在の伽藍を備える大寺院になったと言われる（高野山真言宗別格本山金陵寺西大寺観音院 HP 2019）。

また、観音院の位置する西大寺の町は吉井川の河口に位置する港湾都市であり、観音院の門前町の賑わいとも重なり、中世期を頂点に「宗教的核と港湾商業都市」として栄えた場所である。近世以降も讃岐の金毘羅、児島の由迦神社、備前西大寺の「観音院詣で^{ix}」の要所として、舟運送による物資集散の拠点として発展、繁栄しその様子は昭和前半まで続いた。現在では、岡山駅を中心とするエリアに町としての賑わいは移ったが、往時の「都市の記憶」は街並みとして遺され、趣深い歴史文化空間となっている。

3. 西大寺における修正会と会陽

西大寺観音院の会陽行事が修正会に伴って行わ

れることは前述した通りである。そもそも、修正会とは修正月会の略であり、毎年正月に各宗寺院で行われる年始の法会を指す。元日から七日間（一七日）、十四日間（二七日）など、開催箇所により日時や期間に関して一様ではないが天下泰平、国家安寧、五穀豊穡、商売繁盛などが祈念されることになる。ところで修正会とは単なる仏教行事ではなく、神道や陰陽道、民間信仰などと結びつき、発展してきたことはすでに指摘されており、その複合的世界観は西大寺観音院の会陽や宝木争奪戦を考察する際に示唆的である（西大寺会陽記録保存委員会 1980:29）。

西大寺観音院における修正会は宝亀九年（778年）開祖安隆上人の時代に遡り1200年余の歴史を有すると言われ、本寺院にとり最も重要な行事とされる（西大寺会陽記録保存委員会 1980:29-43）。西大寺観音院の修正会の法会は住職以下、周辺の真言宗系寺院から集まる10余名の僧侶により「職衆」が編成され執り行われ、毎年、本尊である千手観音の前で十四日間、二十二座の法会が営まれている。ところで、さまざまな信仰との結びつきが指摘される修正会であるが、当該地域ではその結願日に多くの仏閣で会陽行事が営まれており、それは本地域の修正会の特徴とも言えよう（立石 2007:13-15）。

西大寺観音院における会陽や宝木争奪戦の成り立ちに関しては、やはり火災で史料が失われており判然としない部分が多いが、寺伝では永正年間に時の住職忠阿上人が火災で消失した本堂再建のために「牛玉紙^{ごおうし}」の頒布を始めたことによるとされる^x。その後、修正会の法会を経た霊験あらたかな牛玉紙は「幸運五福（寿、富、康寧、好徳、終年）」を齎すと評判が地域に拡がり、止むを得なく参集した群集にこれを投与したところ激しい奪い合いが発生し、今日の宝木争奪戦の原型が生まれたとされる。その後、争奪に際し牛玉紙はすぐに破れてしまうため、牛玉紙で木片を包み投げ

入れるようになり、それが一対二本の宝木へ変化してきたと伝えられている（西大寺会陽記録保存委員会 1980:44-48）。

このように西大寺観音院の会陽は、後に修正会に付随する行事として生まれ、発展してきたものであり、宝木争奪戦もまた然りである。一方で、時代が下り牛玉紙や宝木（争奪戦）の価値が高まるにつれて、修正会自体に逆に会陽や宝木争奪戦に関係する要素・行事が多く組み込まれていくことになったと考えられる。先に述べたように、修正会という行事自体がそもそも他の信仰に関して「寛容」な空間であったために、結果的にそれらと複雑に関係し、それらを巧みに取り込みながら約一ヶ月にも及ぶ大行事「西大寺観音院の修正会・会陽」が醸成されてきたと考えられるのである。

4. 西大寺会陽における宝木と宝木争奪戦

4 - 1. 宝木とは

上記のように、宝木争奪戦の起源は牛玉紙の争奪といわれる。そもそも西大寺観音院の牛玉紙とは杉原や日笠といった和紙に「牛玉 西大寺 宝印」と判を押したものである（写真1）。牛玉紙は元来「^{ごおうふだ}牛玉札」とも呼ばれ、寺院や神社で頒布される厄除けの護符のことであった。その中で、仏教諸寺院では「牛玉」を仏教世界の「宝珠」と

位置づけ、世の中の万物を生み出すものとしてこれを人々に授けることになった（高野山真言宗別格本山金陵寺西大寺観音院 HP 2019）。ところで、会陽を実施する寺院・神社の多くが一対二本の宝木を人々に授けている。宝木が二本用意される理由は会陽を実施する寺院・神社により多少異なるが^{xi}、基本的には陰陽道における「陰と陽」の関係性で語られる場合が多く、西大寺観音院もその例外ではない^{xii}（瀬戸 2019）。その場合、二本の宝木とは「世界の気のバランスや調和」を顕在化させた存在と理解してよいだろう。

宝木争奪戦の準備は修正会の結願日から遡ること十九日「^{ことはし}事始め」の行事に始まる。事始めでは会陽の安全を祈る法会が執り行われ、また、別室では宝木を成形する道具の準備である「^{どうぐみが}道具磨き」が実施される。続いてその三日後には「^{しんぎと}宝木取り」の行事が実施される。これは宝木の原木を観音院の西方約3キロに位置する広谷山如法寺無量壽院^{xiii}まで出向き、貰い受ける行事を指す^{xiv}。この行事では、現在でも古式ゆかしき出で立ちや所作が護られており興味深いところである（写真2）。午前0時に観音院で住職から挟箱（原木を収める箱）を預かると、一行は所定のコースを通り無量壽院を目指す。ところで、この行事は「無言」が厳守されており、道中で一切の発声・会話は許されない。また以前は道中で人に出会うことさえも



写真1 牛玉紙と福男



写真2 宝木取り一行

許されておらず、もしも人に出会ってしまった場合には、観音院まで引き返さねばならなかったとされる（西大寺会陽記録保存委員会 1980:69-70）。宝木取りによって観音院に持ち帰られた原木は、屏風で四方を囲み遮蔽された空間を創出した後、愛染明王像の眼前で観音院および無量壽院、寶琳寺^{xv}の住職により、宝木の形に成形されることになる。これを「宝木削り^{しんぎけず}」と呼び、現在でも会陽行事の中で「絶対的秘事」とされるもののひとつである。宝木削りにて形作られた宝木は、その後、修正会の14日間本堂内陣にて祈寿を受けることになるが、その二日目に「牛玉封じ^{ごおうふう}」の行事が行われ、木片に仏様の種子が書き入れられ、入魂の飾りつけがなされ、これによって木片は宝木として“魂”を宿すことになるのである。ちなみに、西大寺観音院の会陽における宝木は直径約4cm、長さ約20cmの円筒状で上部にT字型の割れ目が入れてある。この割れ目は「三弁の摩尼宝珠^{まにほうじゆ}」^{xvi}であり、仏教における三部（仏部、宝部、蓮花部）、三密（仏の体、言葉、心）、三宝（仏、法、僧）をそれぞれ表すものとされ、宝木が創成された段階から確認できるものと伝わる（三浦 1984:11-12）。

4 - 2. 宝木争奪戦

2月第3土曜日^{xvii}の夕刻になるとまわし姿の男達が町中から「わっしょい、わっしょい」の掛け声とともに観音院に集結し始める。彼等は本地域では通称「裸^{はだか}」と呼ばれており、まず観音院の仁王門を潜り境内に入場し垢離取場^{こりとりば}^{xviii}の冷水にて身を清める。その後、「牛玉所大権現^{ごおうしょだいこんげん}」^{xix}や「四本柱^{しほんばしら}」^{xx}など境内各所を幾重にも巡り拝しながら、最終的に本堂大床の上にて宝木争奪戦に備えることになる。

22時^{xxi} 観音院本堂上方の「御福窓^{ごふくまど}」から観音院住職により、その年の「恵方〔開きの方角〕」に向けて宝木が投下される。宝木投下直前、裸群

は大床の上に奔めき、一人に許されるスペースは「枀」一つ分ほどと言われる（写真3、4）。宝木投下の瞬間は照明を一瞬消すため宝木の行方を確認するのは難しく、それは宝木の争奪戦を激しくする効果を持つことになる（三浦 1984:56；Seto 2005:171-178）。また、宝木投下前後に職衆によって「投げ牛玉^{なごおう}」^{xxii}が脇窓から多数投下されるために、裸が宝木の行方を追うことが更に難しくなる。というのも、実は宝木や投げ牛玉からは修正会祈祷の際に染みついた同じ香の香りが発せられており、この香りを頼りに裸が集まることになるからである。結果として、香の香りを中心に大きな人の塊が形成されていくことになり、この集団を会陽では「渦^{うず}」と呼ぶ。渦は徐々に大床から境内へ移動を始め、また参加者を試すかのように毎年いくつもの渦がここかしこに形成され、境内での宝木争奪戦は一層混乱を招き、その分激しさ



写真 3 宝木争奪戦（本堂外観）



写真 4 宝木争奪戦（本堂大床）



写真 5 宝木

を増すのである。

(参加者レベルでは)二本の宝木が観音院仁王門から外部に持ち出された時点で争奪戦は終了となり、その状態を「宝木が抜けた」と表現する。(当日の行事レベルでは)その後、宝木の仮収め場所である仁王門近くの岡山商工会議所西大寺支所に設けられた(米の入った)枡に宝木が納められ(写真5)、観音院側による宝木の検分が終了した時点で(当日の)争奪戦は決着し、「福男(取り主)」が決定することになる。その後、「祝い込み」の行事を経て、宝木はその年の「祝主」に渡されることになる(西大寺会陽記録保存委員会 1980:75-76; Seto 2005:171-178)。

翌週の火曜日、住職、祝主と関係者、取り主と関係者、寺の総代が集まり「宝木納め」の祝式が行われる。それらが済むことによって宝木争奪戦に関する全ての式次第が終了するのである。その後、後祭りが始まる。祝主から寺に贈られた米俵が、また檀家から贈られた酒、醤油などが本堂西側に並べられる。後祭りの期間中には境内で植木市、飲食店など露店が並び賑わいを見せる。そして、会陽は「後会式」を迎えることになる^{xxiii}。稚児入練供養^{xxiv}、ならびに庭義理趣三昧法会^{xxv}が行われ、一ヶ月に渡った修正会、および会陽に関する行事の一切は終了するのである。

5. 修正会と会陽 複合的信仰の世界

修正会の法会は基本的に「悔過法^{xxvi}」に抛り実践され、旧年の悪を正し新年の天下泰平などを祈る空間となる(瀬戸 2019; 中村他 1989:267,502)。西大寺観音院における修正会では、本堂内陣に位置する本尊である千手観音の眼前で十四日間、毎日諸法を厳修し祈願される。あわせて、そこでは備前各地に鎮座する「神々」の名前が読み上げられる「備前国神名帳の朗読」や、五穀豊穡を祈る神道における「祈年祭」の要素も含まれることになる(西大寺会陽保存委員会 1980:33-36; 瀬戸 2019; 三浦 1985:44-46)。このように、西大寺観音院の修正会も厳密に仏教に限らず、他の信仰を包含する空間となる。民俗学者五来は、そもそも仏教行事そのものが日本人の精神生活や社会生活に溶け込む形で生まれ、修正会も国や地域の諸信仰と共生しながら成立したことを指摘しているが、まさに、西大寺の修正会もその例に漏れず「複合的信仰の世界」を体現する場となっているのである(五来 1980:84-98; 西大寺会陽記録保存委員会 1980:25; 三浦 1985:44-46)。

また、会陽行事も修正会と同様に仏教世界に留まるものではない。それは民間信仰等の諸要素を内包し、複合的信仰の世界を結実するための空間となる。たとえば、西大寺観音院では会陽の起源を「一陽来復」説をもって説く。そこでは「…会陽の語源は、困難で厳しい冬が過ぎ、やがて陽春を迎えるという吉兆の意味である…」とされている(高野山真言宗別格本山金陵寺西大寺観音院 HP 2019)。ところで、この一陽来復という思想は、そもそもは陰陽道に起源し、万物の生成を陰と陽の二氣に分けて夜を陰、昼を陽とし、1年を立春から大寒までの二十四節気に分ける。そうすると冬至が陰の極点となり、この日を起点に陽の力が再び増してくることになる。そのために、古くは

冬至を一陽来復と称し新たな季節（生命）の誕生の節目として重要視したのである。田中も会陽の本質を一陽来復と指摘しているが、このように、「一对二本」の宝木もそうだが、会陽行事もさまざまな思想や価値を重要な要素として形成されてきた空間といえるのである（田中 2007:9-11）。

ところで、そもそも西大寺会陽の実施されていた旧暦小正月の行事の多くは、生業の中心であった農業と大に関係しており、会陽もその文脈にあったと考えられる。古くから、人々は月の満ち欠けを基準とし農業を実践しており、特に新年初めて迎える望月の日は一年の起点、重要な節目と理解されていた。そのために、小正月とは庶民にとって実質的な年の初めであり修正会の結願日にあたる1月14日は大晦日、翌15日は正月元旦と理解されていたのである（板橋 1999:624）。たとえば東北、中部、九州などの地域には「十四日年越し」という言葉も残っており興味深いところである（田中 2007:10）。つまり、会陽とはまさに冬から春への節目に位置する行事なのである。また、それら正月行事では「年神を迎え、祀る」年神信仰が重要な役割を果たしていたが、この年神は会陽という行事の本質を考察する上で重要な存在である。たとえば、小正月に行われる「松迎え」や「若木迎え」、「若水汲み」などは興味深い点を多く含んでいる（内田 2000:576-577；田中 1994:672）。たとえば、「松迎え」とは山に分け入り、正月用の松の枝を伐って来る行事を指すが、これを経て人里に齎された松の枝は年神の依代とされ、丁重に家々に迎えられることになる。また「若木迎え」、「若水汲み」などで得られた木や水には年神が宿り、もしくは年神を迎えるための重要な品々とされる。人々は若木を薪とし若水を用いて新年の煮炊きを行い、年神を迎える準備を行うのである（直江 1994:256-257）。山深くに存在する年神を木や水に宿し人里へ迎え入れることは、すなわち新たなエネルギー（生命）を人間界へ運び込むことを

意味する。また、一説ではこのようにして里に招き入れられた年神は、その後「稲」に宿り田に豊作を齎し、秋を経てまた山に帰っていくものともされる。そのために、年神は「作神」、「タガミ（田神）」と同一視されることも多く、農耕神として理解される場合も多いのである（田中 2000:211；宮本 1994:500-501）。このように、年神とは自然のサイクルの中心に位置し、自然の恵みを人間界に齎す超自然的な存在なのである。

さて、本事例に引き付けて考えてみる。実は、会陽行事や宝木には年神との関係において興味深いところがいづつか確認できる。たとえば、宝木争奪戦において、宝木は毎年「恵方〔開きの方角〕」、つまり年神の居る方角に向けて投下されていることは先述した通りである。また、境内に設置されている四本柱の縄の結び目は、必ずその年の恵方に向けて結ばれており、その空間は恵方に向かって開いているのである。そして、宝木争奪戦に関する言い伝えに「宝木は恵方（の方向）でないと抜けない」というものがあり興味深い（小池 1994:732；瀬戸 2019；宮内 1999:211）。このように宝木争奪戦において恵方という概念は強く意識されており、その背景にある年神が重要な意味を成している可能性が示唆されるのである。また、「宝木取り」について考えてみる。宝木の原木を貰い受ける無量壽院が立地する芥子山は古くより権現を祀り、また山岳信仰の修行場であったとされ、この地域の「聖なる空間」となる。そのため、この地で採取される原木には聖域の持つエネルギーが含まれ、宝木はちょうど年神に対する松や若木のように依り代の役目を果たすことにもなる（^{xxvii}）。一説には、芥子山の内包する力を宝木に籠めることも、無量壽院が宝木取りに関係するひとつの理由とも言われ興味深いところである（瀬戸 2019）。このように、恵方や年神信仰の在り方と宝木に纏わる行事の関係性は、宝木の出自や意味を考える上で示唆的であろう。実は、観音院でも

その点には以前から注目しており、観音院においても宝木の内包する性質の一つとして年神を想定し言及している。宝木には年神の持つ超自然的な力が内包されると理解されるところである（瀬戸 2019）。

会陽の中には他にもさまざまな信仰や俗信の要素が確認できる。たとえば西大寺観音院近郷の金山寺^{xxviii}では自寺社の会陽を「五穀豊穰のための百姓の祭り」と説明しこの行事の持つ予祝儀礼的性格が看取される（小嶋 2007:43）。金山寺では西大寺と同様に宝木を五穀とともに紙に包まれて投下するが、激しい争奪戦の際に境内に散った五穀は「縁起物」とされ、集まった人々はこぞってそれを集め持ち帰ることになるのである。このような民間信仰や俗信的要素はその他にも存在する。たとえば、裸が練った後に大床に残された土（泥）を集めて田畑に撒くと「虫害を免れる」とされ、投げ牛玉を田や苗代に立てると「虫よけ」になるとも言われる。また、会陽に出た者のまわしを腹帯にすると「安産」となるなどのさまざまな俗信が民間で伝承されている（小嶋 2007:43-45）。このように、会陽という空間には仏教だけでなく陰陽道や神道、民間信仰などさまざまな世界観が共存・共生しているといえるのである。

さて、これまで会陽の含有するさまざまな価値について紹介してきたが、そもそも会陽という行事に籠められる、その中心にある「仏教的価値」とはいったいどのようなものであろうか。宝木に籠められる仏教的価値を考えてみる。

6. 宝木の含有する仏教的価値

先述したように、宝木の上部にはT字型の切れ込みが存在し、三弁の摩尼宝珠を表していると考え、その意味で宝木とはまさに仏教的価値を具現化した存在といえよう。ところで、摩尼宝珠とはどのようなものであろうか。辞書的意味におい

て摩尼宝珠とは、不可思議な力を兼ね備えた宝珠とされ、人々のあらゆる願い、如何なる願望も叶える魔法の珠とされている（中村元他 1989:956）。ところで、観音院では西大寺会陽の宝木は「摩尼宝珠」そのものであるのと同時に「摩尼宝珠を生み出す道具」でもあるとも指摘しており興味深いところである（瀬戸 2019）。観音院によれば「宝木は、大床に参集した衆生の願いとしての煩悩を吸引し、それを原資として新たな摩尼宝珠を生み出すことができる。つまり、宝木とは数多の煩悩を宝珠へ昇華させる「打ち出の小槌」のようなもの」となる（瀬戸 2019）。

ところで、一般的に「煩悩」と「悟り」は対立的に位置付けられるが、その一方でこれらは「不二・相即^{xxix}」の関係であるとも理解されている。大乘仏教、特に密教の世界観では「煩悩とは即ち悟りの縁」とも表現され、煩悩と悟りとは本質的には「同じもの」と理解され、この考え方は「煩悩即菩提」と呼ばれる（中村元他 1989:947）。ところで、実は「煩悩即菩提」の見地からすると、会陽における宝木の存在、そしてその争奪戦の成り立ちは理解しやすいところでもある。たとえば「宝木削り」を考えてみる。宝木削りの所作が愛染明王の前で行われることはすでに述べたが、これは非常に興味深い。実は、愛染明王とは「煩悩即菩提」を表す尊であり、衆生が本来的に具備する愛欲をそのまま悟りの境地である「浄菩提心の三昧」へと誘う役目を担うのである（中村元他 1989:3；福田 1987:17）。宝木が愛染明王の眼前で成形されること、それはすなわち人々の煩悩を悟りに導く珠（道具）を形作るプロセスに他ならないと考えるのは、むしろ自然な流れなのかもしれない。衆生の願い（煩悩）が大床の上に集まり、それらが愛染明王の力を授かった摩尼宝珠である「宝木」に吸引され、浄化・昇華されていく。そのように考えると、会陽における宝木争奪戦とは、まさに真言密教の世界に存在し、それを体現し、

実現させるものとも言えるのである。宝木の争奪とは、まさに真言宗の重要な教えである「現世利益^{xxx}」を具現化させたものといえるのかもしれない。

ところで、修正会の法会を行う観音院本堂の内陣は「浄土の世界」と言われ、一方で、裸たちが騒めく本堂大床はまさに衆生の生きる「市井の空間」とされる。そのために宝木を内陣から大床に投与した瞬間に、宝木は象徴的に世の中に顕現することになり、同時に宝木は「生命を宿し、生まれる」と言われる。また、宝木が授かる「生命」とは、単に宝木が市井に現れることにより得られるものではなく、それは取り主との関係の中で創られるものと指摘される(瀬戸 2019)。つまり、宝木とは大床の上に現れ、裸達の煩悩を吸収し始めることによりその生命が芽吹き始め、誰かに「授けられた」ことによりこの世に生まれるとも考えられるのである。また、興味深いこととして取り主も宝木を得た瞬間に(良くも悪くも)その内実に大きな変化を生じると言われる(瀬戸 2019)。

たとえば、会陽に関する俗信に「福男の災難」というものがある。これは、福男が御福を授かるのと引き換えるように、不運に見舞われる様を表現する言葉である。意外に思われるかもしれないが、実際に、福男が事故や怪我・病気などに見舞われた事例が少なからず伝えられている(小嶋

2007:43-44)。この現象を評して関係者は「御福が大きかったから」と説明するが、これは、取り主が宝木の大きな力をうまくコントロールできなかった様子を表していると思われる。たとえば、宝木の力を受け止められない者が偶然にもそれを得た場合、その力に圧倒され宝木の力が取り主にとって災厄となってしまうこともあると考えればいいだろうか。つまり、宝木とはアブリアリに「御福を与えてくれる存在」とはならないのである。そのために「御福」をきちんと授かるためには、宝木が内包する巨大な力を受け止めることができる人間になる(である)必要がある。そう考えると、裸達が行う精進潔斎や水垢離など修行は(ある意味で)宝木に“対抗”できるように、自身の身体を鍛え、心を鍛える必要から生まれるものともなろう(写真6)。そして、その文脈からすれば、観音院住職が説く「宝木争奪戦に参加するならば、心身を鍛えてその中心に「仏心」を涵養せねばならない」という教えは非常に分かりやすく、理に叶ったものとなるのである(瀬戸 2019)。西大寺会陽に際して行われる精進潔斎や水垢離^{xxxi}など「行」は、浄祓する悔過^{けか}の過程であるが、その途次で裸達は心と身体を強靱に鍛え、身体という器に「仏心」を宿し、宝木という強大なエネルギーを受け止められるようにする鍛錬のことなのである。そして、それを成し遂げた者はひょっとすると「即身成仏」が叶う存在に近づくのかもしれない。

7. 複合文化表象としての宝木 「はだか」が求め / 求められる価値

これまで述べてきたように、会陽における「御福」が可視化されたものが「宝木」であり、宝木とは仏教の世界でいえば観音様の種子の籠った摩尼宝珠であり、また人々の煩悩を摩尼宝珠に変える、いわば“マジックアイテム”となる。また、同時にそれは年神でもあり、まさに神仏習合のシ



写真 6 裸の行

ンボルともなるのである（田中 2007:8）。あわせて、年神は農耕神とも同一視されるため、超自然的な力によって田に恵みを齎し、また宝木に紐づくさまざまな事物や事象が虫よけ、安産などを保証するように、さまざまな霊力を持って日常に幸せを運ぶ存在となる。このように会陽は修正会と同様に、仏教や神道、陰陽道、民間信仰・俗信などさまざまな宗教や信仰の複合体として醸成されてきたのである。その中で、その価値の中心に存在し、その世界を体現する宝木とは、まず「一対二本」の関係性が世界の気のバランスを表象し、また個々の宝木は①仏様の下にある摩尼宝珠としての力、②年神の齎す超自然的な力、③民間信仰・俗信をも含意する牛玉紙の持つ護符としての力など、さまざまなエネルギーを包含する象徴的存在であり、すなわち、それは地域の諸信仰の複合的シンボルとして「御福」と呼ばれるのである。

そのために、宝木争奪戦は単に人間界で人間同士が競い合うものではなく、複合的価値としての「御福」を得られるように自身の身心を清め、高める必要があり、参加者は精進潔斎に励み、その世界観に合致する自身を醸成することになる。この場合、裸とはすなわちそのプロセスとその実現に際し必要な「メディア」であり、清浄無垢を体現し、また、悔過を実践するために重要な存在である。つまり、メディアとしての身体とは、御福と仏心を宿した自分を繋ぐ重要不可欠な媒体となるのである。

8. まとめ—複合的信仰の結晶「宝木」と西大寺会陽文化

本稿では、信仰とそれを実現するためのメディアとしての身体に注目し、それらが如何に地域の伝統的文脈の中で培われてきたのかについて考察してきた。複合的な価値「御福」が可視化された存在としての「宝木」を得るために参加者は会陽に向けて、自身の身心を準備する必要があること



写真 7 福男と仲間たち

が理解され、その過程としての精進潔斎や水垢離などを行う必然性が確認できた。人々は修行に励み、身体を鍛えその中心に「仏心」を涵養し、仏教を中心とする複合的世界観に合致する自身を形成することに励むのである。つまり、会陽において裸衆とは、単なるコンペティションへの参加者ではない。また、参加者の身体とは、ある意味「文化的な器」であり、彼らの身体は西大寺会陽と地域が育み、神仏に期待される地域と自身を繋ぐ重要なメディアなのである。

西大寺会陽には「宝木は奪うものではない。授かるものである。」という言葉がある。彼らは、一説に2／9000と言われる確率から福男になること自体が、そもそも自分で望んだところで叶うものではない次元にある奇跡的な出来事であることを理解している。そのために精進した結果として「御福」を「頂戴する」ことが叶った場合においても、自分自身の力で得られたなどとは思わず、大きな力からの「授かりもの」と実感できるのである。

これこそ、会陽という行事の本質であり西大寺観音院と街、そして人々が育んできた「西大寺会陽文化」といえるのではなかろうか（写真7）。

【謝辞】

本稿の作成にあたり坪井稜広氏（金陵山西大寺観音院住職）、岡崎俊男氏（西大寺会陽院内世話役代表）、林昭二郎氏（会陽林グループ代表）、斎藤雅之氏（同グループ）、奥

山太一氏（同グループ）、川部裕司氏（同グループ）、中野将史氏（同グループ）、はじめ会陽林グループの皆様、西大寺観音院会陽関係者の皆様、松岡太郎氏（岡山市）には本稿作成に際したいへんお世話になりました。この場を借りて心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

【主要参考文献】

板橋春夫「小正月」『日本民俗大辞典』上 福田アジオ他 あ～そ 吉川弘文館 1999 p.624
内田賢作「松迎え」『日本民俗大辞典』下 福田アジオ他 た～わ 吉川弘文館 2000 pp.576-577
大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂 1994
岡山県教育委員会『「岡山県の会陽の習俗」総合調査報告書』岡山県教育委員会 2007
小池長之「巡り神」『日本民俗事典』大塚民俗学会編 弘文堂 1994 p.732
小嶋博巳「民間信仰・俗信」『「岡山県の会陽の習俗」総合調査報告書』岡山県教育委員会 岡山県教育委員会 2007 pp.43-45
五来重「修正会・修二会」『講座日本の民俗宗教 2』弘文堂 1980 pp.84-98
五来重・桜井徳太郎・大島建彦・宮田登『講座日本の民俗宗教 2』弘文堂 1980
西大寺会陽記録保存委員会『西大寺会陽 西大寺会陽記録保存報告書』西大寺会陽記録保存委員会 1980
瀬戸邦弘 フィールドノート 2019（日時：2019 年 1 月 10 日，於：西大寺観音院，インタビュー：坪井 綾広氏（西大寺観音院住職），斎藤雅之氏（会陽林グループ））
立石憲利「県内の会陽の分布と種類」『「岡山県の会陽の習俗」総合調査報告書』岡山県教育委員会 岡山県教育委員会 2007 pp.13-15
田中宜一「松迎え」『日本民俗事典』大塚民俗学会編 弘文堂 1994 p.672
田中久夫「年神」『日本民俗大辞典』下 福田アジオ他 た～わ 吉川弘文館 2000 p.211
田中英機「会陽の概要」『「岡山県の会陽の習俗」総合調査報告書』岡山県教育委員会 岡山県教育委員会 2007 pp.8-13
直江広治「小正月」『日本民俗事典』大塚民俗学会編 弘文堂 1994 pp.256-257
中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末本文美士『岩波仏教辞典』岩波書店 1989
萩原秀三郎「裸祭」『日本民俗事典』大塚民俗学会編 弘文堂 1994 p.570
福田亮成『真言宗小事典』法蔵館 1987

松長有慶『密教』岩波書店 1991
三浦 叶『岡山の会陽』岡山文庫 1985
宮内貴久「恵方」『日本民俗大辞典』上 福田アジオ他 あ～そ 吉川弘文館 1999 p.211
宮本袈裟雄「歳神」『日本民俗事典』大塚民俗学会編 弘文堂 1994 pp.500-501
宮本袈裟雄「若水」『日本民俗事典』大塚民俗学会編 弘文堂 1994 p.805
福田アジオ他『日本民俗大辞典』上 あ～そ 吉川弘文館 1999
福田アジオ他『日本民俗大辞典』上 た～わ 吉川弘文館 2000
Kunihiro Seto “Traditional and Acculturation of Ethnic Sports in Japan :Ball game “Eyou” “International Journal of Sport and Health Science” Vol.4 pp.171-178 2005.09

【参考 HP】

高野山真言宗別格本山金陵寺西大寺観音院 HP（2019 年 1 月 14 日確認）

【註】

- ⁱ 会陽行事の中心は宝木争奪戦に限るものではなく、餅会陽、福引会陽、餅まき会陽など、さまざまな形が確認されておりその形態は様ではない（岡山県教育委員会 2007:14-15）。
- ⁱⁱ 修正会の法会は天平宝字 3 年（759 年）以前より官大寺で行われていたと言われる（中村他 1989:502）。
- ⁱⁱⁱ 会陽行事は寺社や神社において信仰の枠組みを超えて実施されており、会陽の持つ複合的な世界観を考える上で非常に興味深いところである（岡山県教育委員会 2007:18-19）。
- ^{iv} 宝木は「真木」、「神木」、「榊木」、「信木」、「新木」などと開催される寺院や神社によって異なる表記が確認できる。また、西大寺観音院の宝木の表記もこれまで歴史的に幾度となく変遷を経験しておりこの地方における「しんぎ」の本質を考える上で、興味深いところである（岡山県教育委員会 2007:29）。
- ^v 参加者が裸（もしくはまわし姿）で行う祭を指す。褌や年占を目的とするものが多く、水垢離で身を清めた後に実施される場合が多い。裸で祭りに参加する意味は「生まれたままの清浄無垢な姿」になることを意味するとも言われる（萩原 1994:570）。
- ^{vi} 昭和 34 年 3 月 27 日に指定される。
- ^{vii} 平成 28 年 3 月 2 日に指定される。
- ^{viii} 周防の国玖珂の荘の人で、備前国国府の役人藤原泰明

- の妻と言われる（三浦 1985:28-29）。
- ix 江戸期後半になると讃岐の金毘羅宮、児島の由迦神社は備前西大寺の観音院詣で一種の参拝経路となり、どれがかけても「片詣り」とされて嫌われたそうである（西大寺会陽記録保存委員会 1980:60-61）。
- x 忠阿上人は、祈祷札である牛玉紙の浄財により熊野社が復興を遂げた例を参考に、観音院本堂復興のために牛玉紙を利用したと言われる（瀬戸 2019）。
- xi 岡山県瀬戸内市牛窓町の高野山真言宗千手山弘法寺では「金剛界」と「胎藏界」にて区別しており興味深い（三浦 1985:19-20）。
- xii 西大寺観音院においても一対二本の宝木は「陰・陽」の意味を表すものと理解されているが、現在では、ことさら強調して対外的に語られることはない（瀬戸 2019）。
- xiii 岡山市東区芥子山山腹に所在する高野山真言宗の寺院。神亀二年（725 年）の創建とされ、本尊は薬師瑠璃光如来である。
- xiv 西大寺観音院以外の寺院や神社では、深夜に境内の山林においてその年の吉方に向かって原木を伐る場合が多いとされる。またその際に原木を伐った場所や樹種などは秘密にされる場合が多い（岡山県教育委員会 2007:29-30）。
- xv 岡山市西大寺金岡東町にある高野山真言宗の寺院。弘仁 3 年（812 年）の創建とされ、本尊は千手観音菩薩である。
- xvi 仏典では不可思議な力を兼ね備えた宝珠とされる（中村他 1989:956）。
- xvii 西大寺会陽は本来「旧暦」で行われ旧暦の 1 月 14 日の夜に実施されていた。しかしながら諸事情から昭和 37 年より旧暦 1 月 14 日に近い新暦 2 月第 3 土曜日に固定して開催されることとなっている（西大寺会陽記録保存委員会 1980:65）。
- xviii そもそもは吉井川の水が引き込まれ、参加者が禊を行う場所であった。現在は川の水を引き入れてはいないが、同様の意味、目的により裸の順路となっている。
- xix 本寺院では元来密教の明王である五大明王を、神仏習合の姿である牛玉所大権現として牛玉所殿本殿に祀っている（高野山真言宗別格本山金陵寺西大寺観音院 HP 2019）。
- xx 会陽で裸群が押し合う場に設けられる柱で仕切られる空間を指す。四本柱は本堂の内陣に見立てられた空間であり浄土世界で行を行うように裸達は四本柱で練るのである。西大寺観音院の場合は約 2.8m の間隔で太い四角柱が設置され、柱の上部に太い縄が張られている。
- また縄の結び目はその年の恵方の方角になるように準備がなされる（瀬戸 2019；三浦 1985:24-25）。
- xxi 諸般事情のために平成 22 年から午前零時の投下が 22 時へ変更されている。
- xxii 「^{えだごろう}枝牛玉」,^{くしごろう}「串牛玉」などとも称されるが、一般的には「くしご」と呼ばれる。柳の木を 7 寸ばかりに切り 5 ～ 7 本を一握りとして、牛玉紙で巻いたものである（西大寺会陽記録保存委員会 1980:35）。
- xxiii 以前はこれに合わせて、歌舞伎場面を再現した等身大人形の並ぶ舞台も作られて、後会式の名物であった（三浦 1985:69）。
- xxiv 稚児入りとは 3 ～ 8 歳の少年少女が稚児衣装を着けて行列に参加し、本堂の濡縁を 3 回廻ることを指す。練供養とは、特設のまたは寺内の集会所から地面を通して道場に行くことを指す（西大寺会陽記録保存委員会 1980:78-79）。
- xxv 庭儀とは、道場の前庭に整列して仏讃嘆に博士（曲）をつけて唱え入堂することを指す。理趣三昧とは心を理趣経に専注して営まれる法会のことを指す（西大寺会陽記録保存委員会 1980:78-79）。
- xxvi 罪過を懺悔し、礼仏して身口意の罪過を発露懺悔し、五穀豊穰などの利益を求めるものとされる（中村他 1989:267）。
- xxvii 「道中で人に会ってはならない」という決まりごとは、ある地域の「若水取り」にも認められ、その関連性は興味深いところである（宮本 1994:805）。
- xxviii 岡山県岡山市北区金山寺にある天台宗の寺院。正式には銘金山観音寺遍照院である。天平勝宝元年（749 年）の創建とされ、本尊は千手観音である。
- xxix すべての真実不変の真如の現れであり、悟りの実現を妨げる煩惱も真如の現れに他ならず、それを離れて別に悟りはないとされる（中村他 1989:947）。
- xxx 神仏の恩恵や信仰の功德が、現世における願望の実現として達成されることを指す（中村他 1989:290）。
- xxxi 本来、水垢離など荒行は密教の本来的な行ではなく、いわば前行ともいうべきものである（松長 1991:107-109）。したがって、これも他の信仰の影響により西大寺会陽に導入され、結果として大きな価値が生まれ、受け継がれてきた可能性も指摘される。三浦も禊習俗は後から会陽に加わり、水垢離が行われるようになった可能性を挙げている（三浦 1985:32）。